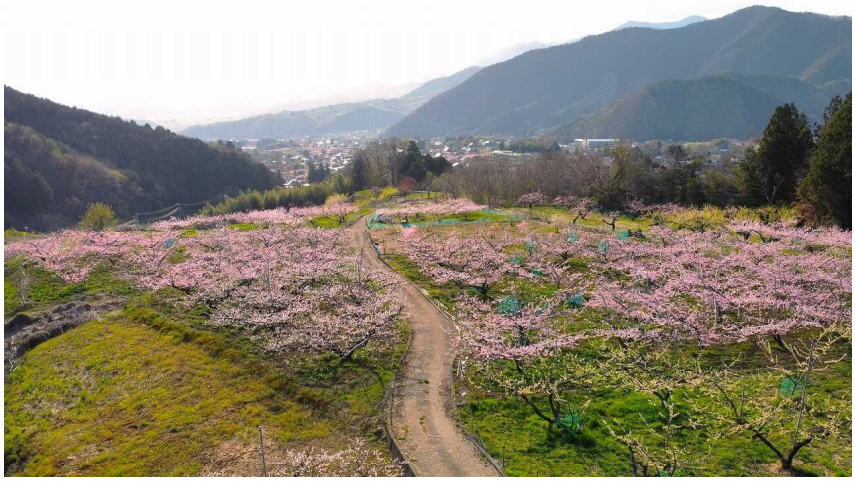
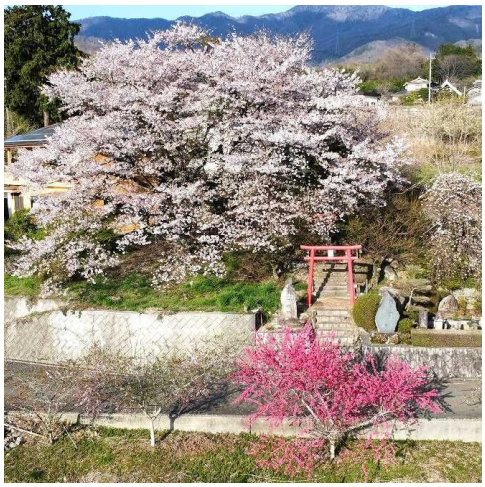
5月

神金公民館だより

第１７０号
２０２４年
５月１日





昨年より１０日ほど遅れてスモモの花が咲き始め，続いてモモの花も咲き出し，花々が咲き誇るまぶしいくらいの春が，いつものように神金の地にやってきました。見渡す景色は，神金の最も美しい季節ではないかと感じました。

同時に，農家の方々にとっては，花摘みや授粉作業などの農作業に忙しい日々のスタート時期がやってきたようです。

塩山北中

塩山北中の「ありがとうコンサート」が３月３１日に市民文化会館大ホールで開催され，各種コンクールで入賞した合唱部・吹奏楽部の生徒たちが歌声や演奏を披露してくれました。会場を埋め尽くした観客の方々は，塩山北中の音楽の素晴らしさに感動していました。

４月５日には，塩山北中最後の入学式が行われました。閉校まで全校で一丸となってがんばろうという決意を感じさせる入学式でした。

神金地区案内図

神金振興会は，神金地区案内図を作成し，観光等で神金を訪れる方々に見ていただけるよう，国道沿いの神金郵便局駐車場に設置しました。

春の例大祭

神金の春には欠かせない神部神社と金井加里神社，そして浜松神明社の春の例大祭が絶好の天気の中で行なわれました。

福蔵院不動尊会

４月７日，福蔵院で不動尊会が開催されました。今年は，満開のサクラの下で稚児行列が華やかに行われました。

福餅まきには，大勢の方々が参加し，護摩祈祷された福をもらっていきました。

神金の歴史

地元の歴史研究家でもある故飯島卓郎氏が，神金小学校PTA会報「ふもと」に執筆し寄稿した「神金の歴史」をシリーズで紹介します。

新青梅街道 四

藤村県令は青梅街道を改修するに当たり、政府からの補助金が見込めなくなったので関係の村々に負担金の割当てをした。

神金村の割当ては金三千八百五十二円六厘三毛であった。当時この金を納めるための今に残る語り草がある。この割当てがあまりにも過酷であったため幾多の悲劇があったそうである。当時の物価と比較するとどんなに過酷であったかが分かる。明治十年には盛り蕎麦が一杯八厘であったが今は三百五十円である。この倍数はなんと四萬三千七百五十倍である。神金村の割当金をこの率で計算すると、一億六千八百五十二萬五千円である。蕎麦の値段だけで判断するのは早計であるが大体は知ることができる。

県令も各事業所や財産家に対し寄付を要請したが思うように集まらなかったので、自ら金百円を寄付して率先垂範の実を示した。関係の村々にこれ以上の負担能力がないことを知った県令は、権力をもって寄付を要求したようである。甲府柳町の丸茂平兵衛外から金百六十円、山田町の若尾逸平外から金五百八十円を寄付させてある。常盤町の興益社からも金一千五百円を寄付させてある。

この頃、山梨県大属斉土斉が金壱拾円と金参十円を再度に渉って寄付してあるが、この人は落合の御屋敷に居を構え（後に田中耕平住宅となり現在無住）私塾を開き、授業料も取らずに希望者に学問を教えた。神金・大藤方面からも大勢の青年が柳沢峠を越えて教えを受けたそうである。

斉土斉は十五年程落合に隠栖していたが七十二歳で死亡し、高橋部落の放光山高橋寺に葬られている。墓地の北側の最上段にイチイの樹に囲まれた高さ六十五糎の墓石に「従七位斉土斉之墓」とありその裏には経歴が刻まれている。

この人が青梅街道改修の最高責任者であったことが諸種の状況から判断して分かった。この道路の主唱者であり地元の総責任者が矢崎治兵衛（清信、後に県会議員となる）であったので、その孫に当たる上小田原の矢崎助只翁にお尋ねしたところ一層の確信を得たのである。

＊次ページに続く

神金の歴史

矢崎翁は、

「私が幼い頃お供をつれて時折お見えになった。子供さんを連れてきたことも覚えているが、家の者は小さい男の子を若様と言っていた。立派な髭をつくった斉土さんには祖父以外の人は話もできず近寄りもできなかった。祖父に丹波・小菅方面への物資の運送業を勧め、援助したのも斉土さんであった。」

と、またそのほかにも斉土斉の思い出話を語ってくれた。

斉土斉は藤村県令と同郷熊本県の生まれで、県令に請われて山梨県大属（課長）となり、明治十一年郡制施行により南都留郡長となり同十三年には北都留郡長を兼任し、後に県の収税長（出納長）になっている。退官後は幾多の苦難と情熱を捧げて完成した青梅街道を忘れ得ず、山深い落合を終焉の地と定めたものと思う。神金村村民となり報酬を求めず地域の青少年の教育に尽くした徳も忘れてはならない。

数年前、落合の田辺関次郎氏から斉土斉について、

「下男下女を置いて殿様のような生活をしていた。学問を教わりに来た人は二十人くらいだった。一之瀬高橋の山を区有林にするよう部落民に勧めたが、広すぎるとか税金がかかるからとかで賛成する人が少なかったので沙汰止みになってしまった。もし区有林にしておいたなら、丹波・小菅なみに恵まれていたと思う。兎に角偉い人であった。亡くなられた時、生前愛された大小の刀剣を棺の中に入れて葬ったそうである。」

と、話を聞いた。

裂石から左折して五郎田部落を経て葡萄沢口までは黒川金山への交通路であった。それから上は宝永三年（一七〇六）甲斐一五萬高石の国主に封ぜられた柳沢吉保が一之瀬高橋一帯にある金を採掘することをねらい、柳沢峠を越え藤尾までをその子吉里につくらせた。この頃、青梅街道の改修と萩原口留番所の改築を記した古文書が残されている。

落合とは柳沢川と高橋川が合流し落合うことから名付けたが、この道と部落は宝永年間以後の新しいもので落合と称する公式地名はなく、柳沢峠の東はすべて一之瀬高橋と称されている。柳沢侯の徳を称え峠の名は柳沢峠と名付けられている。